



TITLE:

類書に表現される中國社會の特性

AUTHOR(S):

松本, 光雄

---

CITATION:

松本, 光雄. 類書に表現される中國社會の特性. 東洋史研究 1957, 16(1): 58-67

ISSUE DATE:

1957-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/148067>

RIGHT:

## 類書に表現される中國社會の特性

松 本 光 雄

### 一

先秦時代から清代までの大約二千五百年間に所産された中國古書籍は膨大なもので、その主要部分は清代に於て整理され、かの四庫全書となつたのであるが、四庫編纂後の清代の書籍、各時代の縣志、道志、府志、省志、山志、寺志、家譜、宗譜等々の中國全古書籍は恐らく優に四庫全書の數倍の量に達するのではあるまいか。しかししてこの中國全古書籍に共通する特性は、これが各時代の政治組織を構成する支配者階層の所産になるものであり、讀書範圍もまたこの階層に限定され、なおかつこれらのものが支配者階層たる意識の下に著述編纂されたことである。經史に屬する書籍は言うまでもないが、子部の哲學、農學、醫學、藝術、隨筆等々も、集部の詩文に至るものまでも、支配者階

層たるの意識に立脚している。さればその内容には中國の支配者階層ならでは了解に苦しむ部分<sup>1)</sup>がかなり多い。この特性はこれを中國の範圍で考究している限りでは何の奇異をも感じないが、他の國々——例えば西洋諸國——のそれと比較する時截然たる差異の存することが了解される。

中國古書籍の悉くが上述した性格を有していた事實は、これらの全古書籍の文體が先秦時代から清代までの支配者階層の獨占した所謂漢文體であるということからも裏附けられる。従つて中國全古書籍に共通する性格並びに内容はただちに各時代の支配者階層に共通する性格の表現反映であるといふことは誰しも肯定する所であらう。

### 二

さてこの中國古書籍のなかで他の國々に於てその例をみ

ない特異の形體をそなえたものは類書ではあるまいか。現存する類書並びに書志書目録に見える散逸した類書の數は極めて多く、その卷帙も膨大であり、各時代に互つて編纂され、その多くは時の王朝自體の事業として遂行され、時の文化層を結集し多大な努力と長い年月を費して完成したものである。

これらの類書は一見種々の用途をもつた辭典とも稱すべきものであるが、その共通した形體及びその果した役割に於て特異なる性格をもつていたのであり、かかる條件に該当する書籍は西洋諸國に於ては殆んど一度も編纂されたりまた編纂を企圖されたことすらなかった。なお日本に於ても中國から傳來した類書の拔萃並びに復刻の事業は行われたが、日本自體の類書の編纂は極めて少い。

かかる西洋諸國並びに日本にその例をみない類書が、中國に於てのみ何の故に各時代に互つてかくも驚歎すべき努力のもとに編纂されたのであらうか。私はここに多數に編纂された類書は、中國の各時代の政治組織を構成する支配者階層のもつ特異なる性格が必然的に要求したものであり、従つて類書の共通した性格を究明することこそ支配者階層

の性格を釋明する一方法であると信じ、以下これに就ての私見を述べてみたいと思う。

### 三

隋書、唐書、宋史等々の書志並びに崇文總目、四庫全書總目提要等々の幾多の書目録に依つて、中國古書籍の分類の變遷を比較検討すると、中國自體に於て考えられた類書の定義とも言うべきものを推察することができるが、これにはなんらの意義も存しない。私見に依れば、類書は編纂者が直接に著述した書ではなく、それぞれの類目の下に既に存在する古書のその類目に相應する部分を拔萃輯録して一書を成したものである。かかるものを類書に共通する形體の定義と考え、類書類以外の古書を精査すると、この形體のものがかなり多い。經部の主要部分がこの形體であることは言うまでもないが、史・子・集部に於ても、例えば史部中の宋史紀事本末一百九卷、經史一百六十卷、春秋戰國異辭五十五卷、通志二百卷、續通志六百四十卷、皇朝通志二百卷、歷代名臣奏議三百五十卷、五朝名臣言行錄一十卷、三朝名臣言行錄一十四卷、皇輿西域圖志五十二卷、日下舊

聞考一百六十卷、蜀中廣記一百八卷、國志監志八十二卷、通典二百卷、續通典一百五十卷、皇朝通典一百卷、文獻通考三百四十八卷、續文獻通考二百五十四卷等、子部中の武經總要前・後集四十二卷、農政全書六十卷、授時通考七十八卷、佩文齋書譜譜一百卷、群芳譜三十卷、廣群芳譜一百卷、植物名實圖考三十八卷、六藝之一錄四百六卷續編十四卷、元明事類鈔四十卷、太平廣記五百卷等、集部の六臣注文選六十卷、古文苑二十一卷、文苑英華一千卷、唐文粹一百卷、漢文鑑四十一卷、宋文鑑一百五十卷、成郡文類五十卷、吳郡文粹續集五十八卷、南宋雜事詩七卷、文章軌範七卷、歷代賦彙一百八十四卷、佩文齋詠物詩選四百八十六卷、歷代題詩類一百二十卷等々は完全に類書の形體を具備したものである。なお縣志、道志、府志、省志、並びに山志、寺志等の主要部分もまたこの形をもって構成されていた。これ以外に一書のなかで類書の形をもつ部分とか、さらにまた皇清經解、說郛、百川學海等の叢書並びに一書籍の集註などをもって不完全の類書と見做すならば、類書の範圍はさらに擴大され、殆んど中國全古書籍の半にも達することが想像される。以下上述した類書形體の書籍をもつ

て一應類書と稱して考究をすすめることとする。

これらの類書以外の古書籍が著述されたものであったから、中國全古書籍はその半が類書形體のもの、残る半が著述形體の書であると言ひ得られる。しかもここに留意せらるべきは著述形體の書が類書の各類目を構成する内容となつてゐることである。しかし類書に採輯された部分は對象とする書の輕重に依つて相違はあつたが、前述したように類書は膨大な數量に達し一類書にして千卷萬卷と稱するものが尠くなかつたから、各時代の主要書籍は殆んど悉く各類目の内容として包含された。<sup>3)</sup>

#### 四

類書の始めを種々の書目が述べているが如く三國時代の魏の皇覽一百二十卷であるとすれば、それから清代まで大約二千年間、編纂された類書は前述したように殆んど中國全古書籍の半に達するほどであり、それに費された勞力もまた驚くべきものがあつたが、如何なる理由にもとづいてかかる大事業が中國に於ては奇異の感なくして行われていたのであるうか。類書はそれぞれ相違した直接の目的<sup>4)</sup>をも

つて編纂されたのであるが、それとは別に全類書に共通した必然的に編纂さるべき根本的理由と、少くとも編纂された時代に果していた共通の重要な役割とがあつた。中國の各時代の政治組織を構成した支配者階層は、現實の時代の倫理、道德、政治、一般諸知識、哲學、文學、藝術等々のあらゆる分野に於ける行動思索の軌範をそれ以前の支配者階層のそれに求めるといふ一種特別の性格をもつていた。しかしこの特異なる性格は、少くとも漢代から清代まで殆んど本質的には何等の變化もなく、つぎつぎに繼承されたのである。かかる理由にもとづいて中國の各時代の支配者階層は、それ以前の支配者階層の所産した書籍をもつてあらゆる分野に於ける行動思索を律すべき軌範であると考へ、既存の古書籍が相當の量に達した時代からは、これらの古書籍を整理統合し、各類目の下に自在に検索でき得る書籍の編纂が必然的に要望されていた。この要望に應じて編纂されることになったのが各種各様の類書であり、各類目の下に既存の古書籍を包含し、個々の書籍に替つて時の支配者階層のあらゆる分野に於ける行動思索の軌範たる役割を果していたのである。かくの如き重要な役割があつ

たればこそ、二千年間各種の類書が異常なる努力の下につぎつぎに編纂され、遂に中國全古書籍の半にさへ達したほどである。

前述したように類書は既存の古書籍をもつて構成され、その時代の支配者階層の行動思索の軌範となつていたから類書は時の支配者階層とも、またこれら支配者階層の著述した書籍とも相似して居り、さらにまた各時代の支配者階層も類書も著述も互に相似しているという關係にあつた。いま類書を中心としてこの關係を述べてみると、例えば或る時代の支配者階層が既存の古書籍をもつて構成するいくつかの類書を編纂し、これらをもつて現實のあらゆる分野に於ける行動思索の軌範としていたとすれば、この時代の支配者階層自體は勿論のこと、これが構成する政治組織とかその歴史變遷なども自ら類書に示された前代のそれに相似した形體にとどまつて居り、さらにまたその著述も前代のものに相似せざるを得なかつたのである。しかしこの相似した支配者階層自體及びその政治組織歴史變遷等々の記録並びにこの時代の著述が、既に存在する古書籍——この時代の類書を構成している材料——と共に次代の類書の

各類目を構成する材料となつたから、これらの類書が前代のものに相似するのは勿論のこと、これを軌範と考える支配者階層自體並びにその著述等々がまた前代のものに相似することになるのである。漢代から清代までの各時代の支配者階層自體の性格並びに政治組織歴史變遷等々を考究すると、それぞれの相違點は存しているものの、その根底に一貫した相似性が存在しているのは右の理由に基づくがためにほかならない。さらにまたそれぞれの時代の支配階層に依つて著述された書籍は、その時代の表現方法とか包含する事例の相違はあつたが、その本質的内容は相似して居り、重複した内容のものが時代ごとにしだいに集積されたのである。いまかりに膨大な量を誇る中國古書籍から同一性格のものを除き去るならば、果して幾許のものが實質内容として残り得るか、興味ある問題ではなからうか。また前述したこれら全古書籍に共通する文體が、先秦時代から清代まで純粹に繼承されたこと自體、つきつぎに文體の典型を類書を通して前代のそれに求めるといふ精神が根底となつていたがためではあるまいか。つきつぎに編纂された類書もそれぞれ相違はあつたが、その根本的性格は相似し

て居り、その主要部分もつきつぎに繼承されたのである。これらのことは現存する唐代から清代までの類書に實證されることであり、皇覽を始めとし、華林遍略とか聖壽堂御覽とかの散逸して傳わらない類書に於ても言い得られることである。皇覽以下の散逸した類書の主要部分は、後の類書に繼承された筈であり、現にその主要部分は宋代の類書太平御覽に存していると言われている。

## 五

古來から三國時代の魏の皇覽一百二十卷をもつて類書の源と定めてゐる。皇覽の編纂された三國時代は兩漢四百年間の統一時代の後を受け、現實の軌範を前代のそれに求めるといふ中國支配者階層のもつ一種特別の理念の熾烈になつた時代であり、また軌範となるべき既存の古書籍が一書の下に整理統合されなければならないほどに増加してゐた時でもあつた。さらに兩漢四百年間に支配者階層のもつ統一した思想とこれを裏附ける理想化した事例とがしだいに構成されたのであるが、漢代の支配者階層は自分達が現實の社會にもつ思想を古くから傳えられて來た周を中心とす

る上古三代の事例の理想化した姿にその裏附けを求めるといふいわば後の類書に於て示される一種特別の性格をすでに充分にもつていた。後述するが漢代に完成されたといわれる現存する種々の基礎的古文獻に存在する周を中心とする上古三代の姿は、多少の例外はあつたろうが古くから傳えられた事例をもととして漢代の支配者階層のしだいに形成されてゆく思想の裏附けとして、理想化されつつ行きつくところに行きついた形のものである。散逸して傳わらない皇覽は、恐らく必ずこれらの現存する基礎的古文獻に包含されている周を中心とする上古三代の理想化された姿を中核とし、それ以後のものをもつてこれを敷衍する事例であるかの如く取扱つた筈であり、これがつきつぎに繼承され現存する唐以後の一連の類書のもつ基礎的形體となつたのである。

## 六

各時代を代表する類書の相違はそれぞれの時代の支配者階層の差異を表現して居り、さらにそれらの類書の推移發展は支配者階層のそれと表裏一體をなしている。皇覽から

古今圖書集成までの各時代を代表する一連の類書の推移發展に窺われる一貫した性格は、過去一切の古書籍の内容を否定することなく、これを包含集積してしだいに膨張發展したことであり、このことは同時に漢代から清代までの支配者階層が過去一切を否定せずにこれを包含集積して進歩發展したことを物語っている。漢代から清代までの歴史にもしも進歩發達と稱すべきものがあつたとするならば、それは過去一切を否定することなくこれを包含集積するという範圍で行われた筈である。漢代から清代までの支配者階層の歴史を通觀すると、あらゆる分野に於てだれもが否定することのできない進歩發達が窺われる。しかしながらこの進歩發達は、過去を否定することに依つてもたらされたものでなく、過去を包含集積して得られたものであり、異質の進歩を遂げたのでなく、包含する範圍が擴大したのである。これは皇覽からつきつぎに編纂されたそれぞれの時代の一連の代表的類書が、各時代毎に増大する材料を包含集積しつつ膨張擴大し、やがて古今圖書集成という決定的段階の類書に到達したことで示される。古今圖書集成は過去一切の古書籍を否定せずに包含集積しつつ發達した類書が

行きつく所に到達したものであり、同時にまた一定の型の中で發達し切った清朝の姿を表現するものでもあった。

## 七

類書の變遷が明示するところの漢代から清代までの歴史推移は、如何なることを物語っているのであろうか。私はこれは少くとも漢代から清代までの中國に、支配者階層の性格を一變させ得るほどの根本的變動が存在しなかったがためではないかと考える。

中國の歴史を考究するに當つて、漢代から清代までがあまりにも長いこと、さらにこの期間のほぼ中間に於て西洋諸國に所謂中世から近世への變動があつたことなどに影響されてか、この期間のなかに社會全般にわたる根本的變動を前提とするいろいろな時代區分がなされることもあつた。しかしながら漢代から清代までの中國には、少くとも支配者階層の性格を一變させ得るほどの變動は存在しなかつたのであり、私は漢代から清代までの間に、西洋に於けると同じ意味での古代とか中世とか近世とかを求めることは妥當でないと考えるのである。

## 八

以上類書を通して漢代から清代までの中國社會の特性を考究したのであるが、なおここに留意せらるべきは中國古書籍の中核をなしている所謂先秦古文獻とこれを生みだした春秋から漢代までの社會との間に、前述した類書とこれを所産した社會との間にみられる關係がすでに嚴然として存在していたことである。ここでいう所謂先秦古文獻とは尙書、周禮、禮記、儀禮等々の經書、左傳、國語等の史書、並びに墨子、莊子、列子、管子、商子等々の所謂諸子の書などである。

これらの古文獻については考證學<sup>7)</sup>とか最近の歴史學などの立場からその著述者や成立年代などに關して詳細な研究がなされているが、私はこれらのうち少くとも前掲のものなどは、一定の時期に特定の人物によつて書かれた所謂著述形體の書として取扱うべきものでなく、春秋から漢代までの社會が生みだした後の類書と共通した性格のものと考えるのである。現存する尙書、儀禮、周禮、禮記などは春秋時代から支配者階層が常にもちつづけた現實の社會の行



動を律すべき軌範を過去に求めるといふ理念が生みだした過去——周を中心とする上古三代——の理想化した事例説話が生成集積しつつ漢代になって行きつくところに行きついたので、現實の社會に於ける行動思索の軌範を過去に求めるといふ理念とか長期に亘って形成された事例説話が包含集積されているという形體<sup>10)</sup>などの類書と共通した性格のものである。國語、左傳などはそれぞれ編纂されるに際して直接の目的をもっていたであろうが、現存するこれらの書は周代について軌範とすべき春秋時代の理想化したつ生成發展する事例説話を包含集積して一書をなしたものである。所謂諸子の書に於ても例えば現存する墨子、莊子、商子、管子、列子などは、部分部分には眞理追求の意識も窺われるが、その書全體は諸家がそれぞれの主張を裏附ける理想化した事例を過去に求めつつ生成發展した集積であつて、後の類書に窺われる根本理念のもとにその形體をそなえつつ後の一連類書の發展段階にみられるような生長過程を経て成立したものである。

これらの關係は所謂先秦古文獻に於けるばかりでなく、例えば漢代の書を代表する史記に於ても明瞭に窺い知られ

る。史記が一貫した意識をもつて書かれたとか史料に對する取捨選擇のあとが窺われるとかいうことは否定しないがこの書が口誦とか既存の古文獻とかを通して生成發展しつつあるさまさまの理想化した過去の事例説話を包含集積する役割——つまり後の類書が既存の古書籍に對して果している役割——を果していたことも否定できない。むしろ積極的に表現してみるならば、春秋時代からいろいろな立場からいろいろな形で生成發展しつづけた理想化した過去の無數の事例説話が漢代になって行きつくところに行きつき、現實を律する軌範として整理統合されて行く過程が史記に示されているのである。

さて春秋時代から漢代までの間に生みだされた古文獻のなかに後の類書に共通する性格のものが存在するということは何を意味するものであろうか。私はこのことは春秋から漢代までの社會が種々の古い時代のものを存しつつも、根本的にはすでに後の社會に相似する段階に到達していたことを意味していると考えるのである。

註

(1) 例えば易とか禮とかに關するもの。

(2) 群書類聚・續群書類聚は中國の所謂叢書に該當するもので、後述する中國に於ける類書の共通した形體並びに編纂の理由とは少しく相違したものがあつたのである。

(3) かかる例は永樂大典、古今圖書集成に於て明示される所である。

(4) 例えば白孔六帖、文苑英華などのように作詩作文に必要な辭藻、典故を知るためのものとか、玉海、古今源流至論などのように應試に必要な論策の材料を得るためのものとか、全芳備祖、廣群芳譜などのように事物の檢索に利用するためのものとか、永樂大典、古今圖書集成などのように時の支配者の面目を表示せんとしたものなど、それぞれ直接の編纂目的をもつていたのである。

(5) 皇覽以前に類書の萌芽とも稱すべきものが既に存在していた。漢代の新序、說苑、列女傳、秦代の呂氏春秋などがそれである。

(6) 清代になると考證學の發達にともなつて、特に重要な基礎的古文獻の眞偽が論究されることが多くなつたが、かかる現象は實は古書籍の内容をただの一つも否定しないという各時代の支配者階層の根本的性格と矛盾するものではなかつた。考證學自體は、漢代以來あらゆる分野に於ける行動思索の根本的軌範と考え來つた古文獻が、果してどの範圍まで眞に理想と考える古人——主として周代人——の手になつたものであるかどうかを究明しようとしたものであり、古文獻が現實の社會で最も重要な意義をもつているとの前提に出發して居り、古文獻それ自身の存在を否定しようとしたものではなかつた。

(7) 考證學のなかには現存する古文獻の一つ一つの内容をいろいろの方法で検討し、これらの古文獻の内容が古くから伝えられたり

研究者自身が想定したりしたその書の著者やその成立年代などとの部分に於てどのように矛盾撞著するかを考究し、それをもつてその書の眞偽判斷のもととしていたものがある。その結果矛盾撞著の甚しいものは偽書であり、いままでの方法で甚しく矛盾撞著しないように思われるものは偽書でないと判斷された。しかしながらここに留意せらるべきは、眞偽の判斷の前提となつたものは古くから傳えられたり研究者自身が想定したりしたその書の著者や成立年代であつたことである。私は古文獻には所謂偽書と稱すべきものは存在しないと考える。

(8) 現存するこれらの書と古くから傳えられたこれらの書の著述者とか成立年代などとはどのような關係があつたであらうか。他日の機會に詳細に論究してみたい。

(9) 「周の文王」とか「周の武王」とか「孔子」とかいう人物に關する傳記、説話、言行等も同じである。かれらは現實の社會を律する軌範として求めた過去の代表的人物であり、古文獻に散在したりまとめられたりしている彼等の傳記、説話、言行等はいろいろの立場で理想化されつつ發展集積し漢代に於て行きつくところに行きついたものである。

(10) 類書そのものの編纂時期とは別にその類書に包含されている材料の一つ一つは長期に互つて成立したものである。これらの古文獻も現存の形に發展した時期とは別にその部分部分は長期に互つて成立した筈である。前述の考證學の研究對象となつた矛盾撞著もこれらの書の特性と見做さるべきものである。

(11) これらのほかに孟子、荀子、韓非子等がある。これらがここでい

て類書に相似したものであるか、所謂著述形態のものであるかは暫く措くが、その内容に窺われる共通した性格はその論説や主張の裏付けとしてそれぞれの立場に於ける理想化した過去の事例説話を求めていたことである。

(12) 例えば太平御覽とか古今圖書集成とかいう類書が成立するまでには、皇覽以下各時代の事例を包含しつつしだいに發展するいくつかの相似した一連の類書が存在したのであり、淵鑑類函の前に唐類函、廣群芳譜の前に群芳譜が存在した。現存する墨子とか莊子とか管子とかいう書も恐らくは同一名のしだいに包含する事例説

話の範圍を擴大して行くいくつかの一連の相似した書を先驅として成立したものであらう。古文獻を精査すると現存するものと同一名の成立時期とか内容とかの少しく異なると思われるいくつかの書が存在したようであるが、恐らくは現存するものの成立過程にある相似の書であらう。

(13) 後の一連の代表的類書には現實の社會に於けるあらゆる分野の類目を悉く包含しようとする意識が存在する。史記の本紀、表、書、世家、列傳の記述範圍にもこれと類似する意識が窺われる。

## 昭和三十一年度東洋史卒業論文題目

### 修士論文

元代の土と吏

勝藤 猛

淮軍の成立—李鴻章の登場

小野 信爾

明代蘇州府の發展と農村の變貌—先進經

濟地帯における都市と農村

寺田 隆信

### 學士論文

宋代の鎮についての節記

梅原 郁

アッバス朝下における驛遞路について

岡崎 正孝

桑弘羊について

加納和三郎

五代南漢國の發展とその對外交渉

楠山 修作

種族革命と政治革命の思想—新民叢報と

民報の論争を中心に

郷 由紀子

フールスの租税—アッバス朝衰亡期に

於ける土地所有並びに徵税問題

清水 誠

商鞅の變法について

永田 英正

middle of the 16th century in the coastal areas and those along the Yantzu river.

## **Some Characteristics of Chinese Society as Reflected in Lêi-shu or Cyclopaedias**

*Mitsuo Matsumoto*

Of all books produced throughout the ages from the pre-Ch'in period down to the Ch'ing a category called "lêi-shu" or a kind of cyclopaedia is of the nature we scarcely find in other parts of the world. In volume they constitute almost a half of all Chinese books before the modern period. These lêi-shu seem to indicate the fact that the Chinese ruling class was always inclined to find their norms of behaviour in old books, so that the features peculiar to each period must be somewhat reflected in the lêi-shu of that period. One of the characteristics common to all lêi-shu from Huang-lan (皇覽) to Ku-chin-t'u-shu-chi-ch'êng (古今圖書集成) is that they include everything contained in old books without selecting certain things and excluding others. This fact seems to show that the Chinese ruling class or, in other word, the literati remained fundamentally of the same nature from Han down to Ch'ing. Incidentally, in view of the fact that such pre-Han books as Shu-ching (書經), Chou-li (周禮), Tso-chuan (左傳), Chuang-tzu (莊子) and Kuan-tzu (管子) share to a certain extent the nature of later lêi-shu, the period from Ch'un-ch'iu (春秋) to the Han must have already reached practically the same stage of development with the succeeding periods.